

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

Kinship : Emotion of the Belly versus Mind of the Head : Two Centers and the Cultural Contrasts on Udot, Truk

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 河合, 利光 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/00003730">https://doi.org/10.15021/00003730</a>

## 腹の心と石の心

——トラックにおける性差と中心——

河合 利 光\*

- |                  |             |
|------------------|-------------|
| I. はじめに          | 2. 腹としての土地  |
| II. 神話・伝説にみる中心   | IV. 腹の心と石の心 |
| III. 土地と腹のシンボリズム | V. 結 び      |
| 1. 中心としての女性      |             |

### I. はじめに

すでに別稿でも紹介しておいたように、ミクロネシアのトラック諸島には「女性が土地、人間、あるいは母系集団を産む」という類の慣用句がある [河合 1978: 206; KAWAI 1987]。それは「女性が土地に子供を産んで殖やす」という意味なのだが、それにしても、なぜ人間だけでなく、土地や母系集団まで「産む」と表現されるのだろうか。

興味深いことに、トラックと同様、母系社会であるメラネシアのトロブリアンド諸島にも、先述の慣用句とよく似た言い回しがある。筆者は、トロブリアンド諸島の女性の象徴的役割を再分析したブリンドレイの著書を通して、トロブリアンドにも「私の菜園の腹（子宮）は子供ができると膨れる」という慣用句のあることを知った [BRINDLEY 1984: 17]。

ブリンドレイは、トロブリアンドの菜園と女性とが象徴的にパラレルな関係にある事実を、マリノフスキーをはじめとする調査者のデータを広く収集して再分析した。菜園は女性の腹に、作物は人間の子供に類比される。重要な作物であるヤムイモは、「耳」「目」「身体」「喉」を持ち、人間と同じ活動をすると信じられている。さらに、ヤムイモは「菜園の子供」と呼ばれ、ヤムイモの成長と子供の成長とが同一視されている。菜園には女性の身体名称がつけられていて、菜園の隅は「乳房・乳頭」(nunula),

\* 園田学園女子大学文学部

耕作された部分は「腹・内側・子宮」(*lopou-la*)と名づけられている。前者の *nunula* の接頭語は「同じサブ＝克蘭」を表している [BRINDLEY 1984: 17-18]。

もちろん、オセアニアにおける土地と女性との隠喩的關係は早くから知られていた。天なる父と母なる大地の結合によって生産物が豊穰になるという信仰は広くオセアニアの各地から報告されているし、菜園が女性の子宮ないし身体と、作物が菜園の子供と考えられる事例も少なくない<sup>1)</sup>。しかしながら、それが社会と文化全体の秩序の中で系統的に充分明らかにされてきたわけではない<sup>2)</sup>。

土地と女性の象徴的關係を分析したブリンドレイの視点は、確かにトラックのデータに照らしても魅力的である。明らかにそれはトラックとの比較可能性を示唆しているからである。

次節以下で検討するように、トラックでも、女性の腹は土地と同一視されている。ちょうど腹が身体を中心にあって、食物を貯え生命の再生産を行う場であるように、土地も食物(作物)を貯え、生産を行う場である。事実、菜園で最も作物のよくとれる土地はヌーカン (*nuukan* 腹)と呼ばれている。

しかしながら、トラックの場合をより詳しく検討してみると、女性の腹は、島、村、氏族、家のような、より広い社会文化的脈絡において中心性の象徴となっていることがわかる。さらにまた、本論の後半で論じるように、食物と感情の座である腹は、冷静な思考(これは「石の心」と呼ばれる)の座である頭に対照させるとき、その意味がより明確になる。腹が家庭内領域の女性の象徴であるとするれば、頭は(村のリーダーが「頭」と呼ばれるように)政治領域を管轄する男性の象徴である。このような、頭と腹、政治領域と家庭内領域、男性と女性の二つの中心性(ヌーク)の分離と相補性こそ、トラック文化の基本的な理念であると考えられる。

それは、土地と女性の隠喩的連合の問題が実は男性と女性の性差の問題でもあり、

1) BRINDLEY [1984: 74-81] がすでにこの問題に関するオセアニアの研究を整理している。

2) トロブリアンド諸島の女性の象徴的役割を論じた人にワイナーがいる。ワイナーはその一連の研究 [WEINER 1976, 1978, 1980] を通して、トロブリアンドの女性は生命の再生産と祖霊の血の再生産を行うことにより母系集団のアイデンティティと永続性を可能にする役割を持つと論じた。彼女はそれを、交換、駆け引き等の社会関係を視野に入れながら分析している。

ブリンドレイのトロブリアンド研究に対してワイナーが、女性の菜園活動における政治的意味が分析されていないという強い不満を表明したのは、おそらくそのような下地があるからである [WEINER 1987]。

しかしながら、たとえそのような欠陥があるにせよ、オセアニアにおける土地のコスモロジカルな意味を丁寧に掘り起こして整理したブリンドレイの仕事は、少なくとも本論の立場からすれば小さくはない。ヤング [YOUNG 1986] もその書評で、理論的には弱い文献考証にすぐれているとして「メラネシアの性差 (gender) 研究にささやかな貢献をしている」と、消極的ながら肯定的評価を与えている。

かつまたそれはトラックの社会文化秩序全体の脈絡の中で考察されるべきことを示唆している。それゆえ、まず次節において、筆者が住み込んだウドット島のマニティウ (Mwaanitiw) 村のデータから<sup>3)</sup>、神話と伝説を手がかりに、トラック全体の社会文化秩序における中心の概念の位置づけと意味とを確認することから始めたい。

## Ⅱ. 神話・伝説にみる中心

トラックの伝統的信仰生活の中心は、天界に住む最高神のエヌーナップ (*Énúúnapp*)、その兄弟のセメンカーロール (*Semenkóóror*)、そしてエヌーナップの子供と考えられているヌークエイネン (*Nuukeynen*) の三神であった。天地創造の神は、エヌーナップとセメンカーロールである。トラックのイタン (*itang* 戦争, 策術, 外交, 神話, 伝承などの知識を持つ専門家) の間には次のような話が伝承されている<sup>4)</sup>。

太古の昔、エヌーナップとセメンカーロールが、天から地へ何か雨のようなものを降らせた。そのとき大地が大きく揺れ動き、大地の最下層に住む神ソーローン (*Sóóróón*) が、水蒸気のような白い煙を天空に向かって立ち昇らせた。すると、それらが結合して大きな渦巻きが生じた。こうして、地上のあらゆる生命の源であって、世界の人間の運命を左右する、目に見えない不可思議な力であるマナマン (*manaman*) ができた。マナマンは動植物の生命原理であり、人間を動かす神秘的な力であるから、明らかに、ポリネシアのマナ (*mana*) と同系統のものである。トラックでは、天と地の結合によって生じたマナマンが大地に播かれたと伝えられている。

エヌーナップとセメンカーロールが天と地の中間 (*nuuk*) に遣わしたのがヌークエイネンである。ヌークエイネンは、最高神の命令を地上に伝え、地上の出来事を天に知らせる任務を持っていた【神の中心性は「ナップ」(大きい意) とか「ヌーク」(中心の意) とかいう神々の名前そのものに示されている】。

トラックでは、この三神がすべての霊的存在の中心であり、人々はさまざまな機会にこの三神を崇拜した。この神々は人間を愛し、殺人・窃盗のような悪い行為を戒め、良い行いをする者には利益を与えたが、逆に、悪い行いをする者には、遠島、病気、死のような災いをもたらした。

ところで、エヌーナップはさらに、地上に二人のキョウダイ、ニオウプフェヌ

3) ウドット島はトラック環礁のほぼ中央部に位置する。ウドット島の調査にあたっては、園田学園女子大学海外研修費 (1987年度) の助成を得た。

4) イタンの知識については、ウドット島の旧総首長キントキ・ヨゼフ (Kintoky Joseph) 氏より教えを受けた。

(*Niowupwéñú*) とネーウォーニフェヌ (*Neewooniféñú*) を遣わした。ニオウプフェヌ (土地を産む意) とネーウォーニフェヌ (子供を育てて土地に与える意) は、大地に人間の子供を産んで殖やした<sup>5)</sup>。

人間が殖えてのち、トラックへ最初に移住してきた人々は、コシャエ島から渡ってきて、まずトラック環礁の西側の水道 (入口) から入った。けれどもあいにくの天候で視界が閉され、前方に何も見えなかった。ちょうどカヌーがトル島 (トラック最大の島) の近くまで来たとき天気が回復して、突然、前方にトル島の高い山々が立ち塞がった。人々はその山を見て<sup>6)</sup>、口々に「山だ！」と叫んだ。以来、この環礁はトラック (*Truk* 山の意) と呼ばれるようになった。

しかし、ちょうどその時、潮の流れが速くなってそれ以上近づけなかったので、一旦水道の外へ出て、迂回して別の水道から入り直し、モエン島のメチティウ (*Mechitiw*) 村へ到着した。それゆえ、現在の主島であるモエン島がトラック全体の伝承上の発祥地となった。その後、人間が殖えるにつれて、モエン島から周辺の島々に移住して行った。

ウドット島に最初に移り住んだのは、二人の姉妹、ニーサモレーノン (*Niisamwoorenon* 首長の妹の意) とニーラポレーソン (*Niirapworeson* 「そこに住む」意) である。この姉妹がまずマニティウ村に住み、そこで子供を産んで殖やしたと伝えられている。

さて、かつてウドット島は、伝承上の発祥地であるマニティウ村の他、ペニア (*Peniya*)、モノウェ (*Monowe*)、トゥンヌーク (*Tunnuuk*)、ウォニップ (*Woonipw*)、ファナマ (*Fanama*) の合計6つの村から成っていた (図1参照)。さらに、表1に示したように、この6つの村は西側と東側の二つのグループに分かれていた。西側には、マニティウ、ペニア、モノウェ、ファナマが属し、東側にはトゥンヌークとウォニップが属した。マニティウとトゥンヌークがそれぞれのグループの中心であった。

伝承によると、トラックに最初移住して来たのはサブヌピ (*Sópwnupi*) 氏族であった<sup>7)</sup>。ウドット島に最初移住した二人の女性もこの氏族の出であった。後に、さまざまな氏族がこのサブヌピ氏族より分かれた。

5) この二人の神のうち一人が男性であるか女性であるかはまだ明確に断定できない。ニオウプフェヌは明らかに女性であるが、ネーウォーニフェヌも接頭語ネー (*nee*) が女性を表わすと思われるので、おそらく女性である。

6) トル島のウィニ・プウェット (*Winipwéét*) 山が最高峰で、海拔 443m ある。ウィニ・プウェットとは「鼻の上」の意味である。この山をウドット島から眺めると人間の鼻の形に見える。

7) 本論では、母系出自集団に相当するトラックのエイナン (*eyinang*) とエテレケス (*eterekes*) を、まとめて「母系氏族」あるいは単に「氏族」と呼ぶ。エイナンは一般にエテレケスより範囲の広い母系のメンバーを含む。

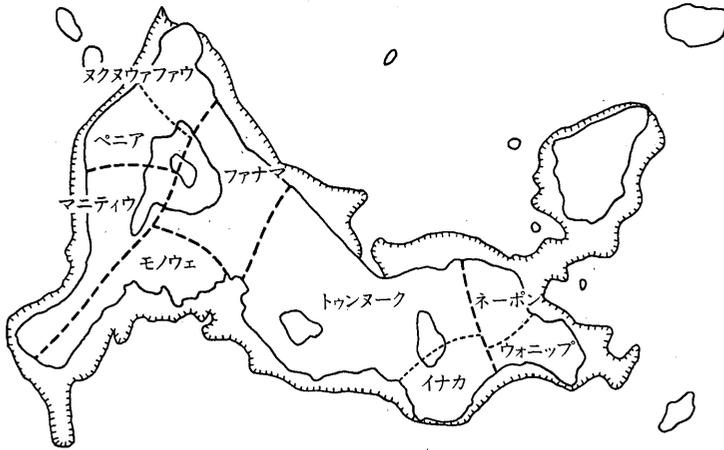


図1 ウドット島地名

太い破線はかつての行政区分である。  
 ヌクヌウァファウ、イナカ、ネーボンの村としての独立は新しい。  
 「首の後ろ」の意味を持つヌクヌウァファウの名称は、島の頭にあたるマニティウと島の腹にあたるトウンヌークとの関連でつけられているものと思われる。

サプヌピ氏族がウドット島を支配していた時代、マニティウ、ペニア、ファナマは一つの村であった。ところが、その後、フェファン島に興った一氏族、サペノ (*Sāpenó*) 氏族が勢力を持ち、戦争でサプヌピ氏族を倒してウドット島の支配権を確立してから、サペノ氏族の総首長 (*sowupwupwún*)<sup>8)</sup> の息子たちがそれぞれの村の首長に任命されて独立の村になったと伝えられている。

第二次大戦後、以上の6つの村に加えて、ネーボン (*Neepon* 真中の意) がウォ

表1 ウドット島の村の名称とその意味

西側グループ	
マニティウ	……よそから来た人々の世話をする意
ペニア	……時々悪い行いをする意
ファナマ	……紛争の調停をする意
モノウェ	……仕事をすぐかたづける意
東側グループ	
トウンヌーク	……言うことをきかない意, 中心の意
ウォニップ	……腹の上の意

8) 日本の統治時代、ソープン (*sowupwupwún*) は総村長、各村の首長 (*sómwoon*) は小村長と呼ばれた。ソープンは大酋長または高等首長 (*high chief*) の呼称を使うこともできようが、本論では総首長と呼んでおきたい。

ニップから、イナカ（日本名）がトゥンヌークから、そしてヌクヌウァファウ (Núkú-núwéféwu 首の後の意、後述) がペニアから分かれて独立の村になった。

ところで、サプヌピ氏族がウドット島を治めていた時代、マニティウ村とペニア村が、神話・伝説上の総首長ソウマル (*Sowumwuwáár*) の直轄地であったという伝承がある。

ポナベ島を治めていた神話上の始祖ソウフォースピ (*Sowufóónupi*) は、妹のニコウプープ (*Nikowupwuwup*; *owupw* は産む意味で、*wuwupw* は腹を意味する) の8人の息子たちを、カチャウ (*Kachaw* コシャエ島のこと) からカロリン諸島の島々に遣わせ、それぞれの島の支配者とした。

コシャエ島には長男のソウカチャウ (*Sowukachaw*) が留まり、トラックのモエン島にソウウォニーラス (*Sowuwóóniras*)、フェファン島にソウファ (*Sowufa*)、トル島にソウトル (*Sowutol*)、ウマン島にソウクウォプ (*Sowukuwopw*)、そしてウドット島にソウマルを遣わした。さらに、トラックの離島にはソウファナーヌ (*Sowufanaanu*) を、ヤップ島にはソウヤップ (*Sowuyap*) を派遣した。

このうち、ウドット島に遣わされたソウマルは、マニティウ村に住み、島を治めたと伝えられている。しかし、奇妙なことに、ウドット島の中心はマニティウではなくトゥンヌークであるとされている。これには次のような理由があげられている。

第一に、トゥンヌークは地理的にウドット島の中心部に位置している。

第二に、トゥンヌークは、ウドット島を人間にたとえると「腹」にあたる。トゥンヌークは、パンの実、タロイモのような作物の豊富な地域で、人間に「食物を与えてくれる場所」であるから、人間の食物の入る場所、つまり腹と同じである。

トゥンヌークという名前は、要するに、島の中心＝腹を意味する。ヌークは中心の意味であるが、同時に腹をも意味する。

島と同様、それぞれの村にもヌークがある。それを筆者が住み込んだマニティウ村の例でもって説明しよう。マニティウには、ソウマルが初めてウドット島へ来たのに因んだ地名がいくつかある。

一つは、マニティウ村の背後にある山の頂にあるファーフワル (*Faawwar*) である。ファーフは「石」の意味で、ワルは「来た」という意味の動詞である。山頂に現われたソウマルを見て、人々が「ソウマルが石 (*faaw*) の上に来た (*war*)」と叫んだところから、この地名ができたという伝説がある。

二つ目は、マニティウ村のリーフの少し沖合にあるファーフエル (*Faawpwer*) である。これは平たく大きな岩で、少し満ち潮になると水面下に沈むのでふだんは見え

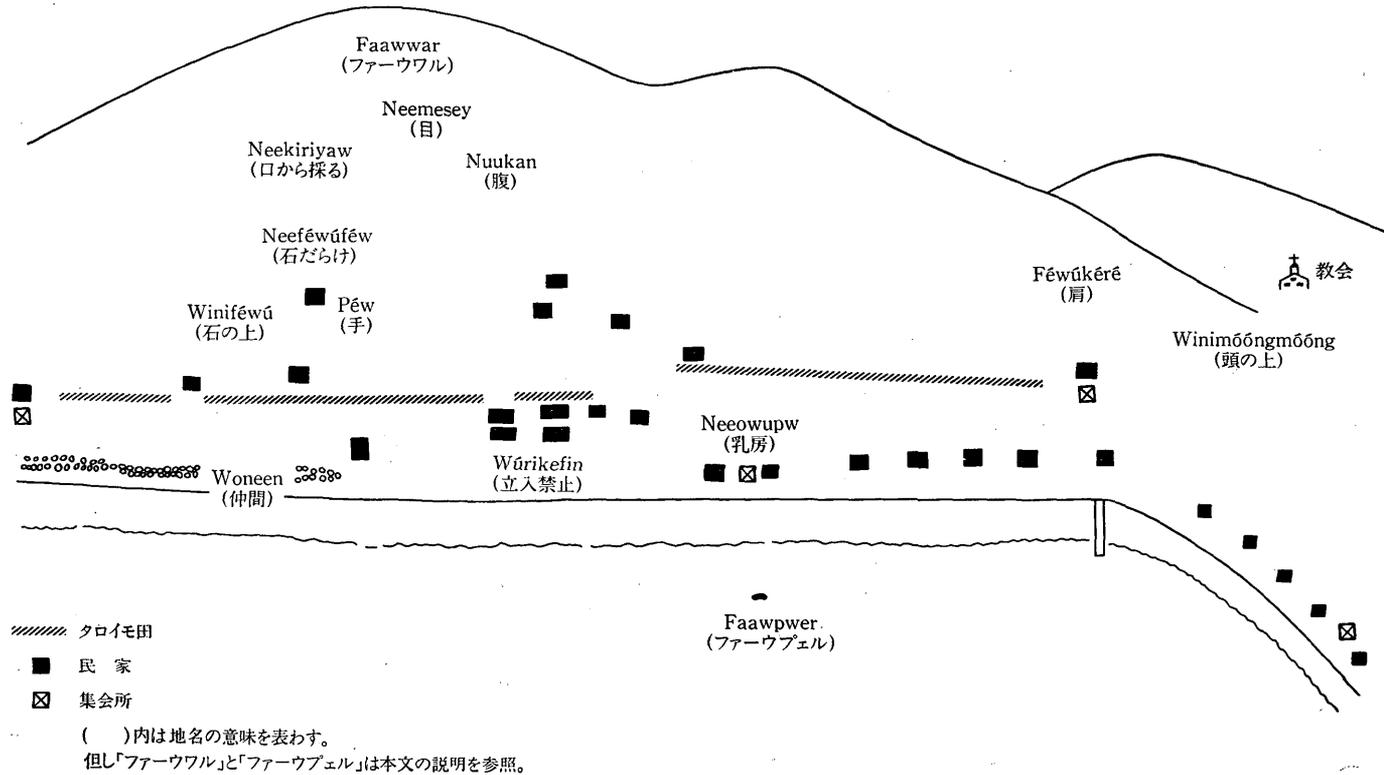


図2 マニティウ村略図

ないが、干潮になると姿を現わす。この岩の名前の由来も山頂の地名と同じで、この岩 (*faaw*) のところで漁をしていた人々が、山頂に姿を現わしたソウマルを見て「ソウマルが来た (*puer*)」と叫んだところから、ファーウプェルと呼ばれるようになったと伝えられている。

さて、マニティウ村にも、いくつかの中心 (ヌーク) がある。

第一は、山頂のファーウワルの右下にある「ヌーカン」(*Nuukan*) と呼ばれる土地である (図2参照)。ヌーカンはヌークと同義で、マニティウ村の食物の中心を意味する。

第二の中心は、ソウマル伝説に関連のある上述のファーウプェルである。この岩は、村の中心部に位置する。さらに、現在の村の政治の中心、つまりサベノ氏族の集会所の沖合にある。

第三の中心は、やはりソウマル伝説と関係のあるウィニファウ (*Winiféwú* 石の上の意) とウリケフィン (*Wúrikefin* 立ち入り禁止の意) である。かつては、ウィニファウの上側に多数の人家があった。この土地には大きな岩があるが、それはソウマルの「遊び場所」であったという<sup>9)</sup>。その岩の下側に、ウリケフィンと名づけられた土地がある。ここにはかつてソウマルの集会所があったという伝説があり、そのためこの土地は現在でも「人間の住む世界の中心」であると考えられている。

以上のように、トラックでは、島、村、土地のそれぞれのレベルに神話や伝説によって裏づけされた中心があり、それも多義的に設定されている。この中心の意味をより深く理解するためには、土地、社会関係、及び母系出自体系における女性の中心的な位置づけから検討しておく必要がある。

### Ⅲ. 土地と腹のシンボリズム

#### 1. 中心としての女性

トラックには「フェフィン・エナップ」(*feefin enap*) という慣用句がある。「エナップ」とは「大きい人」あるいは「中心的な人」の意味であるから、「女 (フェフィン) は偉い」というほどの意味に解釈できよう。

9) ウィニファウとウリケフィンの近くに、ソウマルの時代に造られたという石畳の歩道がある。この道は *Woneen* (仲間の意) と名づけられ、ソウマルの「遊び場所」と伝えられている。しかし、日本統治時代に造られたと推測するインフォーマントもいるので、スペイン、ドイツ、あるいは日本の統治時代に外国人によって造られた後、それが伝説化した可能性も否定できない。

ふつうこの言葉は女が男を指図するという意味で使われる。トラックの男は「女は理由もなく感情的に怒るから犬と同じ」だと言う。女は男にしばしば激しい口調で「吠える」。男はその「激しい口調」が恐ろしいが、妻を大事にしているから罵られても黙ってじっと耐えることが多いのだと言う。

もちろん、これは主観を交えた男側の言い分にすぎない。夫も妻に対して攻撃的に振る舞うことはよくある [SWARTZ 1958]。事実、トラックの女性は家庭内での男性の暴力を恐れている。従って、女性上位は、あくまで個人差の問題として理解しなければならぬ。

むしろ、問題はこのような文化理念の生じる社会的背景であろう。その理由は後に明らかになるはずであるが、さしあたり、「女は偉い」といわれるその他の理由をいくつかあげておきたい。

#### (1) 女は男の行く道

トラックには男が女について行く、あるいは男が女に奉仕するという意味の慣用句がある。

女は男の行く道 (*mwáán faaniten feefin*)

男の骨は女 (*chúú chék feefin*)

いずれの慣用句も、「女こそ男の生き甲斐」という意味を持つ。後者の慣用句の「骨」は男の精神的な支え、つまり生き甲斐を表している。男性のインフォーマントの一人は、この2つの表現を説明しながら次のように述べた。

「女は男の命だ。男は女から命を授かった（つまり女から生まれた）のだから女のために命を捨てる。男は女のために命を大切に、女を護り、身体を丈夫に保つよう心掛ける。この世に女がいなければ喜びがない。この世に喜びがあるのは女がいるためだ。女がこの世にいないと淋しくて気が狂うだろう。」(括弧内は筆者補足)

以上は私的な発言ではあるが、一般に受け容れられている見解でもあると思われる。

「女は男の行く道」の別の例は、居住規則に見ることができる。ただし、妻方居住が多いとはいえ、それを「規則」と呼べるかどうかは疑問である。

娘の両親の許可が得られると婚約 (*kófót* 様子を見る意) をする。その際、婚約した男の側の親族が一回目のキース (*kiis* 姻族間で交換される物財) をする。最初のキースは石焼きした食物を贈るのでウーム・キース (*wuumw kiis*) と呼ばれる。その返礼として、女側は魚を贈る。これはマーニ・キース (*méeni kiis*) と呼ばれる。

二回目のキースは、結婚のとき取り交される。これをウーム・ウアス (*wuumw wuas*)

と呼ぶ。ウアスとは両親を残して去る意味で、文字通り、結婚すると女性は夫に連れられて家を出る。ちょうど男女が一緒に道を歩くとき男の方が先に行くのが正式マナーであるように、結婚してから女性が男性の家に移るのが本筋と考えられている。

しかしながら、それに矛盾する別の力が働く。つまり、妻は夫を自身の親兄弟に奉仕させる義務があるので、夫に圧力をかける。そのため、結婚当初は夫方と妻方を往來する生活がしばらく続き、最終的には、夫婦の独立の家を建てて住むか妻方の家に引っ張られてそこに落ち着くことが多い。

一般に、妻方に住まないとうまくいかないと考えられている。それは妻とその親族の社会的牽引力の方が夫方のそれより勝っていることを示している。妻方居住は「女は男の行く道」の社会的帰結と言えよう。

## (2) 女は土地を釣る

女が「土地を釣る」(*ééyian fénu*) という慣用句は第一にキースに対して使われる。しかしそれはより広い意味も含んでいる。

すでに述べたように、結婚に際して夫方は妻方の親族にキースをするが、食物以外に土地をキースすることもある。土地のような大きな姻戚間の贈与は返済を義務づけられているので互酬的であるが、夫から妻に与える土地のキースを、妻が「土地を釣る」と表現する。次のような話しが伝えられている。

モエン島とウドット島の間にあるアーヤン島と呼ばれる島がある。昔、その島を所有していた男が妻を深く愛していたので、死ぬ前にその島を妻に与えるよう遺言した。遺族は遺言に従い、その島をその女性に与えた。以来、その島はアーヤン島(*ééyan* 釣った島の意)と呼ばれるようになった。

土地のキースが互酬性を理想としているにもかかわらず、「女は土地を釣る」と言われる正確な理由は明らかでないが、アーヤン島の伝説が示すように、夫が妻に土地を与える機会がしばしばあるからだと思われる<sup>10)</sup>。

さらに、結婚後、永続的に取り交される姻族間の贈与交換(キース)には、互酬性を理想としてはいるが不均衡な面もある。夫は妻の兄弟のさまざまな要求を拒むことができないからである。夫が妻の兄弟に与えた物を取り返すのは、一度吐き出したものを食べる「犬のようだ」として嫌われる。

「イノウモト(*inowmoto*)、イノウモナ(*inowmona*)」というイタンの言葉もある。前

10) ウドット島の隣のロマヌム島でフィールド・ワークを行なったグッドイナフ[GOODENOUGH 1951: 50]は、「この取り引き(*kiiis*)は動産のみに限られているようだ」と述べている。しかし、明らかに土地のキースもウドット島では行なわれている。

者は、結婚すると女は財産を持って来るという意味で、逆に後者は男が結婚すると土地・財産を持ち出す、というほどの意味である。同様に、イタンの言葉として「イナヌメト (*inanumeto*), イナヌメイノ (*inanumeinó*)」がある。ヌメ (*nume*) とはカヌーに入った水を掻き出す杓 (*nuume*) のことで、前者は、女が杓でカヌーに水を入れ、後者は男がカヌーの水を外に汲み出すたとえである。この場合、カヌーは母系集団の比喩である。

いずれも女性の有用性を説く言葉であるが、「女は土地を釣る」という表現は、それが貴重な財産であるゆえに、女性の価値を説く集約化された表現となる。

(3) 女は中心を強く縛る

「男が女の後をついて行く」のも「女が土地を釣る」のも女性が母系集団の中心(ヌーク)にあるからである。女性は土地に子供を産んで殖やす腹を持つゆえに、母系氏族のヌーク(中心・腹)となる。

女性の中心性を端的に表わす概念はナー・リ・ヌーク (*naa ri nuuk*) であろう。この言葉は母と子の関係を表わすのに使われる [KAWAI 1987: 118-119]。ナー (*naa*) は女性の尊称であり、リ (*ri* または *riiy*) はヤシ縄で縛る意味を持つ。ヌーク (*nuuk*) は無論、腹または中心の意味である。それゆえ、ナー・リ・ヌークは「女性が中心を強く縛る」というほどの意味であろう。母系出自は、ナー・リ・ヌークの連続したものと捉えることができる。

母と子は、同じ母系集団に所属し、肉を意味するフトック (*futuk*) の強い絆で結ばれる。父と子は、別々の母系集団に所属し、血の意味のチャー (*chaa*) の関係にある。ナー・リ・ヌークはフトックの関係のみを指すので、父と子はナー・リ・ヌークでもフトックでもない<sup>11)</sup>。

父を排除した母と子の一体化されたイメージは、「家族」にもある。トラックには核家族に相当する概念としてイネプイナウ (*inepwinéw*) があるが、この言葉は、イネイ (*iney* 母の意)、プイ (*puwi* キョウダイの意)、ナーウ (*naaw* 子供の意) の合成語と考えられ、その中に父 (*semey*) は含まれていない。イネプイナウから連想されるのは、一人の女性が機織りをしているとき、その夫と子供が手伝い協力している姿だといわれるが、いずれにせよ、女性がその中心にある。

母と子は、同じヤシの葉にもたとえられる。ヤシの葉は、一本の太い枝を中心に、

11) 母と子がナー・リ・ヌークであるのに対して、子供は父のアファクール (*efékúr*) である。父と子は異なる母系氏族に所属するのでナー・リ・ヌークではないが、父と子の関係が社会的な重要性を持たないということではない。

その両側に細くて長い無数の葉を拡げる。枝を中心として、一方の側の葉が母親であり、他方の側が子供である。そこには、片側と片側が合わさって一つの大きな葉になるという、母と子の一体化されたイメージがある。同様に、母と子は同じヤシの木になる実であるとも言われる。一本のヤシの木には、ほとんど同じ形の実が鈴なりになる。ここにもやはり、母と子の対等で一体化されたイメージがある。以上のような比喩的表現も、やはり父と子の関係に対しては使われない。

すでに明らかなように、親族領域において女性が中心（ヌーク）的であるのは、何よりもまず女性が子供を産む腹（ヌーク）を持つからである。

## 2. 腹としての土地

さて、ここで土地と女性の隠喩的連合の問題に目を転じてみよう。まず、土地と人間との関係は次のような慣用句によく表されている。

人間だけが土地 (*aramas chék fénú*)

人間だけが食物 (*aramas chék mwéngé*)

人間だけが財産 (*aramas chék pisek*)

人間だけが仕事 (*aramas chék angaang*)

人間 (*aramas*) がいれば土地 (*fénú*) も食物 (*mwéngé*) も財産 (*pisek*) もある。つまり、人間が土地に住み、そこで働いて (*angaang*) はじめて土地も生き、食物や財産ができる。言い換えると、人間が土地に住み、耕し、木を植えて仕事をすれば、土地は役に立つ。人間がそこで働かなければ、悪い木が生えて役に立たない土地 (*nmofitingaw*) になる。それゆえ、人間が土地であり、土地が人間である——上記のセットになった4つの慣用句はこのように教えている。

土地は人間に食物や財産を与えてくれるが、逆に、人間が土地に働きかけることによって土地が活きるという「文化の弁証法」<sup>12)</sup>がここに認められる。

人間の住む土地の作物はよく育つが、人間の住まない土地の作物は育たないという彼らの思考も、やはり人間と土地との情緒的つながりを反映している。作物は人間の声を聞くとよく実を結ぶ。ファン (*fanang* 料理場) の煙が木の股から立ち昇ると、その匂いを木が嗅いで実を大きくつける。木が人間の住む家を見下すと大きく育つ。

12) ラビー [LABBY 1976] はヤップの民族誌を記述して、人と土地との相互規定的関係を「文化の弁証法」と呼んだ。ヤップにはトラックより複雑な首長制度が発達しており、浄と不浄の観念にもとづき土地が格づけされている。社会的地位はどの土地を所有し、どの土地に住むかにより決まる。

トラックにはそのように明確な土地と社会的地位との対応関係は認められないが、人と土地が相互に依存しようという思考は認められる。

そして、人間がパンの実を搗くと、その音を聞いて木が喜び大きな実をつける。このような人間の声、匂い、音、つまり生活の気配は、作物に刺激を与える効果があると考えられているので、オートメイ (*ótoomey* パンの実の豊穡を祈る儀礼の意) と呼ばれる。人間がいて土地は活きるのである。

さて、土地はいくつかの点で女性に似ている。なぜなら、土地は人間と同様、食物の貯えられる場所であり、女性が子供を産むように作物を生産するからである。

土地を女性と同一視する思考は、人間、特に女性の身体名称が地名になっている例のあることから推測できる。図2に示したように、たとえばウィニモンモン (*Wini-móongmóong*) は「頭の上」の意味で、現在そこにはキリスト教教会が建っている。また、マニティウ村の最高位氏族のサペノ氏族の集会所のある土地ネオウプ (*Neewu-pw*) は「乳房」の意味である (因みに、筆者はこの土地に住んだ)。その他、「腹」(*nuukan*)、「肩」(*kéeréfewú*)、「目」(*neemesey*)、「手」(*péw*)、「口」(*neekiriyaw*) を地名とする土地もある<sup>13)</sup>。配置は必ずしも正確とは言えないが、図2を眺めて女性がうつ伏せになり横たわっている姿を連想するのは、筆者の思い過ごしであろうか。

山を女性と見る発想は確かにトラック人の心の中にある。彼らは山に入ることを「トゥッカウィーウィー」(*tukkawiiwii*) と表現することがある。これは一人の女性が複数の男性と性交する意味で、ここから男性が山に入る行為を性行為と同一視していることがわかる。同様に、男が山に入ることを「トゥーキー・サム」(*tuuky sómw*) と言うこともある。これも山を自分のものにする意味で、セックスのメタファーである。山が女性にたとえられていることは、「妻がいる」と言う代わりに「山がある」と表現されることのあることから明らかである。さらに、山は女性の恥骨と、その山に生えている木は女性の陰毛と、同一視されている。

山に限らず、土地そのものが女性のイメージで眺められている。実際、トラック環礁内にある島の一つ、フェファン (*Fefan*) 島の名前は女性 (*feefin*) に由来するし、ウドット島にある村の一つ、ウォニップは「腹の上」(*wóówuuupw*) の意味である。さら

13) 「口」(*neekiriyaw*) は正確には「口から採る」意味である。グッドイナフ [GOODENOUGH 1951: 172] の作成したロマヌム島の土地地図を眺めてみると、やはり「口の中」(*Neejō*) と記される土地名がある。

この地図をみると、マニティウとの共通点がいくつかあることに気づく。まず、島の中央に“Nuuken Fény” (土地の中心の意) がある。さらに、“Wini-pwëët” (鼻の上)、“Winipwëw” (手の上) のような、身体名称の地名もある。また、石 (*féwú*) にまつわる地名も多い。“Winifëw” (石の上)、“Neettifëw” (重なった石)、“Woccofëw” (おそらく Mokokfëw の誤りで、割れた石の意)、“Söpwuni-fëw” (石の半分半分)、“Neefëwyfëw” (石だらけ)、“Neefëwynap” (大きい石のある場所)、“Neejin Achaw” (石の源) など多数ある。

土地名として身体名称と石にまつわる名前をつけるのはトラック全域の傾向らしい。

に、港や水道も女性とみなされている。そこに出入りする舟が男性というわけである。

土地と女性との象徴的關係を示唆するデータは他にもある。作物がネイ・モルコン (*neyi morukón*) と呼ばれるのもその一例である。ネイもモルコンも「子供」を意味する。トラックには、菜園に入る時は朝食前に行かなければならないという俗信があるが、それは自身が食事をとる前に菜園の「子供」(作物) に食べさせるためだと説明されている<sup>14)</sup>。

女性と子供のイメージで捉えられる土地は、エヌーナップ、ヌークエイネンその他の男性の神々の住む天と対照的である。神話では、エヌーナップにより、子供を殖やすため大地に送られた神々は女性であった。

天と地の対照性がどの程度男性と女性の二元論的世界観を反映するものであるかは、より詳しい調査と考察とを必要とするが、ここで、天と地の結合によって地上の生命原理としてのマナマンが創造されたプロセスが、女性の体内で胎児の形成されるプロセスとよく似ている事実を指摘しておくのも、無駄ではあるまい。

トラックでは、男性の「血」が胎児の生命の源と考えられている。その血が女性の体内に入ると、胎児が形成され始める。しかし、一カ月目までは男性の血のままである。ところが、2～3カ月経つとその血が次第に肉 (*futuk*) に変化する。この段階はオヌーロン (*onuuron*) と呼ばれる。オヌーロンとは、胎児が人間の身体となって、子宮に包まれているという意味である。4カ月目になると、このオヌーロンが完全に肉に変化し、モルコン (*morukón* 子供の意) となる。歩き始めの子供までがモルコンと呼ばれるから、妊娠4カ月目が大きな節目であることがわかる。そして、妊娠6カ月目に完全な人間の形になる。

要するに、胎児の形成過程は、父の血が母の肉 (フトック) に変化する過程である。これは、父方より母方を重視する彼らの社会観に一致する。しかも、天より雨のようなもの (男性の「血」に似ている) が降って、大地から立ち昇った煙 (肉のように白い) と結合して生じる神話上の生命発生のプロセスに似ている。生命は、天から地へ、父から母へ注がれ、そこで育まれる。以上のような筆者の推測が当を得ているとすれば、大地は生命を育む女性の「腹」である。

この問題との関連で興味を魅かれるのは、新生児の臍の緒と胎盤を、産婦の母系氏族の土に埋める慣習である。トラック人は、臍の緒も胎盤も腸の一部、つまり肉 (フ

14) タロイモとタロイモの掘り棒はどちらも *woot* と呼ばれる。トラックには人を押搦するため *woot* を男根とみなす表現がある。この場合、*woot* が男性の象徴であり土地 (タロイモ田) が女性とみなされるわけであるから、掘り棒で土地を掘る男性の行為は性行為を表していることになる。

トゥク)の一種と考えている。それゆえ、彼らの説明によると、臍の緒と胎盤を氏族の土に埋めるのは、死体を埋葬するのと同じである。「肉(フトゥク)は土に帰る」と言われる。そのため、死産・流産の子供(そして成人の死体さえ)も土に埋める。人間の肉は、ちょうどそれが母親の腹から生まれたように、いわば土地という「腹」に帰るのである。

#### IV. 腹の心と石の心

ところで、ウドット島の中央部にある村のトゥンヌークに、「土地の中心」とか「食物の貯蔵場所」の意味のあることはすでに述べた。この地名にはさらに「言うことをきかない」という意味もある(表1参照)。それはトゥンヌークが、「言うことをきかない」意味のトゥーヌク(*ttuunik*)と発音が似ていることに起因する。ここで重要なのは、語呂あわせそのものではなく、トゥーヌクの語源である。トゥーヌクは「ヌーク」(腹・中心の意)に他人の言葉を入れず、身体の外へ「飛ばす」(*ttuu*)意味だと考えられる。それゆえ「わがまま」の意味になる。

それに似た言葉に“*nuky nuuk*”がある。それは腹(*nuuk*)の外側(*nuky*)を指し、「嫌い」という意味を持つ。逆に、腹の内側(*nee*)を指す“*neenuuk*”は、「好き」「真心」の意味で使われる。要するに、腹は感情の座なのである。トラックの人々は、臍から上の、私たちなら胸と呼ぶ部分も含めてウープ(*wuupw*)、臍から下をヌーク(*nuuk*)と呼ぶ。さらに、その両者を総称して、ヌークまたはヌーカン(*nuukan*)という。ヌークと同じ腹を指す言葉にサー(*saa*)があるが、これもやはり感情表現に使用される。いくつか例をあげるなら、“*saangaw*”(直訳すれば悪い *ngaw* 腹 *saa* の意味)は「腹を立てる」，“*saani*”は「好き」の意である。また、“*saanuuk*”と云えば、「心から好き」の意味になる。

腹が人間の感情(喜び、悲しみ、怒り、好意、嫌悪、恐怖、驚きのような心の動き)の座であることは、以上で明らかであろう。

トラックの人々は、だれでも良い心(*nuukeni*)と悪い心(*nuukungaw*)の二つの心があると信じている。腹は、相反する善と悪の感情の共存する場所である。それゆえ、絶えず微妙に揺れ動く不安定な個所でもある。ウドット島の腹であるトゥンヌークが、呪術・宗教的な特徴を付与されているのは、おそらくここに起因する。トゥンヌークは、妖怪や呪術師の住んでいた場所として知られている。最も有名なのは、おそらくネンメス(*Nemwmes*)の伝説であろう。

昔、トゥンヌークの山に魔法を使う一族が住んでいた。彼らはファナン（料理場）を空中に飛ばしてパンモチ（パンの実を焼いて搗き、餅状にしたもの）を作っていた。ある日、ソウヤップの娘のネンメスがトラックに花輪を探しに行きたいとソウヤップに言った。ソウヤップは、トラックには有名な魔法使いがいるから、南側を通ってはいけなと忠告した。しかしネンメスはその忠告を忘れ、南側を通過してウドット島にやって来た。一度、ヌクヌウァファウ（図1参照）にある岩で一休みしたあと、トゥンヌークへ向った。トゥンヌークの魔法使いは、その娘がソウヤップの娘のネンメスであると見抜き、呪薬を入れた食物でネンメスをもてなした。ネンメスは、足に呪薬をつけて海を渡ろうとしたが、渡ることができず、泣きながら死んでしまった。死体はトゥンヌークの隣のウォニップの山中に埋葬された。ネンメスの亡霊は現在でも恐れられており、暗闇に、ネンメスの大きな顔が浮ぶことがあるという。

くり返せば、トゥンヌークが宗教的領域とみなされているのは、トゥンヌークがウドット島のヌーク（腹・中心）であることと無関係ではないと思われる。ネンメスが「腹の上」の意味を持つウォニップに埋葬されたのは象徴的である。

ちょうど漢字の「中心」という文字が真「中」にある「心」と書くように、トラックのヌーク（腹・中心）も「心」の座である。それと同時に、宗教的な性格を帯びやすい。それはトラックのあらゆるレベルの「中心」について当てはまる。

トラックでは、どの母系氏族も、作物の豊富にできる土地を中心＝腹に決める。これをヌーク・フェヌ (*nuuk fēnu* 土地の腹の意) と呼ぶ。かつては、そこに食物を置いて、エヌーナップその他の神々に豊穰を祈った。

また、家 (*iimw*) を守護する神はヌークエイネン（この神の名そのものがヌーク、つまり中心の宗教性を暗示させる）である。昔は、この神を祀る神棚が家の中心（ヌーク）に吊り下げてあり、人々はそこに食物を捧げて祈ったと伝えられている。

以上の諸事例から明らかなように、腹は、村、土地、家などの中心性の象徴であるばかりでなく、感情と宗教性の座と考えられているのだが、ここでさらに、中心に係わるもう一つ別の側面に目を転じてみよう。その別の側面とは、中心に石が結びついている事例の存在である。

ウドット島にはヌクヌウァファウ (*Núkinúwéféwí*) という名の村がある（図1参照）。先述の民話では、ネンメスがこの村の岩の上で休憩したことになっていた。

ヌクヌウァファウとは「首の後ろ」のことであるが、筆者のインフォーマントの説明によると、ヌクヌウァはヌクヌク (*núkinúk*) に由来する言葉で、ヌークヌーク (*nuuk-nuuk*) と同じ、信用の意味である。紐を結ぶと中心（ヌーク）に結び目ができる。結び

目は固いから人間の堅さ、つまり信用を意味する。ファウ (*féwú*) は石の意味で、紐の結び目と同様に固いので、やはり人間の信用を意味する。ヌクヌウァファウは、首の後ろに石を置いた状態を指すから、「何があってもなかなか動かない」「信用がある」と同義である。

トラックでは、石は特別な象徴的意味を持つ。そもそも、トラック人の源郷とされているアチャウ (*Achaw*) 自体が玄武岩の意味である。伝説上の総首長ソウマルが初めてウドット島のマニティウ村へやって来たのも石の上であった。さらに、ソウマルは石の上 (*Winiféwú*) に住んだと言い伝えられている。図2に示したように、石にまつわる地名も多い。

特に興味深いのは、石が人間性を表わす象徴として使用されていることである。トラックには、今まで論じてきた「腹の心」の他に、「石の心」(*ekiyekiyy faaw*) と呼ばれるものがある。それは「石のように何も考えない」(つまり頭が悪い) という否定的意味と、「石のように強い心を持つ」という肯定的意味とがあるが、概して後者の意味で使われることが多い。ヌクヌウァファウがそうであったように、石を身につけるのは、「強い心」を持った立派な人間の比喩的表現である。「重い頭」(*móong-chchowun*) は、頭に石を置いて身動きできない意である。これは「石を腰に置く」(*féwú féwún kiisómw*) のと同様、何があっても黙って我慢する状態を指し、転じて人間の信用を意味する。「石を口に入れる」(*neeyaw féwú*) のも、怒らない、人の悪口を言わないことのたとえである。

また、石を多く身につけるのが、政治的リーダーの理想である。トラックの言葉では、首長の坐り方をファウモーターサム (*féwúmwootisómw*) と呼ぶ。これは石を頭、首の後部、口、および腰に置いて石の上に坐る意味で、いかなることがあっても黙って坐り、なかなか動かない強い意志を表わしている。立派な首長の条件の一つは、石を身につけているかのようにもの静かで、簡単には怒らないすぐれた人格を持っていることである。

逆に、直情型の人間は石を持たない人で、水にたとえられる。海の波のように気の「荒い」人間は他人に信用されず、友人もできない。立派な人間として評価される人は、荒波に揉まれてもびくともしない海の岩のような人である。信用ある人間の象徴である石は、このように、水と対照される。

筆者が、理想的な結婚相手はどのような人かを尋ねたとき、まじめに働く「男らしい」(*féwú féwmwáán*) あるいは「女らしい」(*féwú féwfeefin*) 人間であるという答えが返ってきた。ここで「らしい」と訳したファファウ (*féwú féw*) は「石だらけ」の意

味であるが、転じて人間の「固さ」をも表わしている。ここから、石のように固い人間が高い評価を受けていることがわかる。

さて、少し回り道をしたが、ここで、「石の心」がヌーク（腹・中心）とどのような関係にあるのかを検討してみよう。

第一に、石が村の政治の中心に関与していることはすでに述べた。伝説上の総首長ソウマルは、ウドット島およびマニティウ村の人間世界の中心であるウィニファウ（石の上の意）に住んだ。また、村の「中心」にあるとされる岩（ファーフエル）は、現在のマニティウ村の政治の中心（サペノ氏族の集会所）の沖合にある。

第二に、石と政治との関連で注目されるのは、大きな家や氏族の集会所を建てたとき、家の中心の床下に石を埋める風習のあったことである。次に、家の中心（ヌーク）と石との象徴的關係を説明しよう。

図3に示したように、家の各部分に人間の身体名称がつけられている。一見したところ、それは人間が四つん這いになった姿を想像させる。だが、よく見るとその像は必ずしも鮮明ではない。足を表わすかに見える地上から垂直に建てられている柱は人間であって、長い柱は男性、短い柱は女性を表わすという。

伝統的なタイプの集会所の場合（図4参照）、家の内部に6本の柱が建っている（新しい集会所には、この内部の柱がない）。この6本の柱は、天井にある四角形に組まれた梁（横柱）と交叉する。入口に近い梁はアウチャム（額の意）と名づけられている。2本のアウチャムと直角に交わる2本の梁は、ティナウと呼ばれる。アウチャムは人間の額を、ティナウは手を表わすから、それは集会所の内側で2人の人間が向い合い両手両足を投げ出して坐っている姿である、とインフォーマントは説明した。

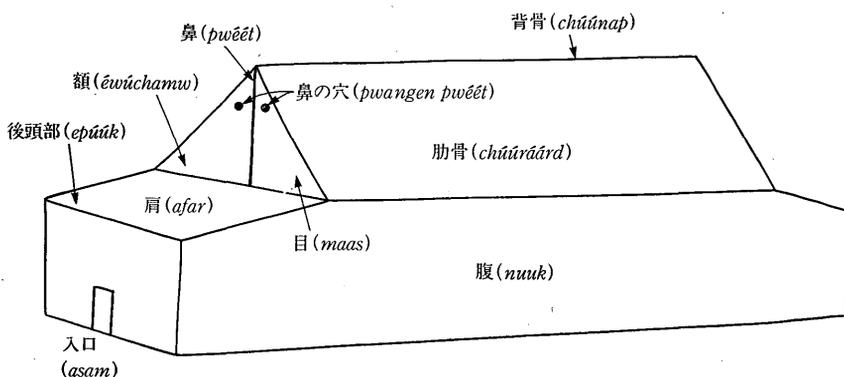


図3 家屋の部分名称

（部分名称はファナの建物とほぼ同じである。図4、5、6参照）

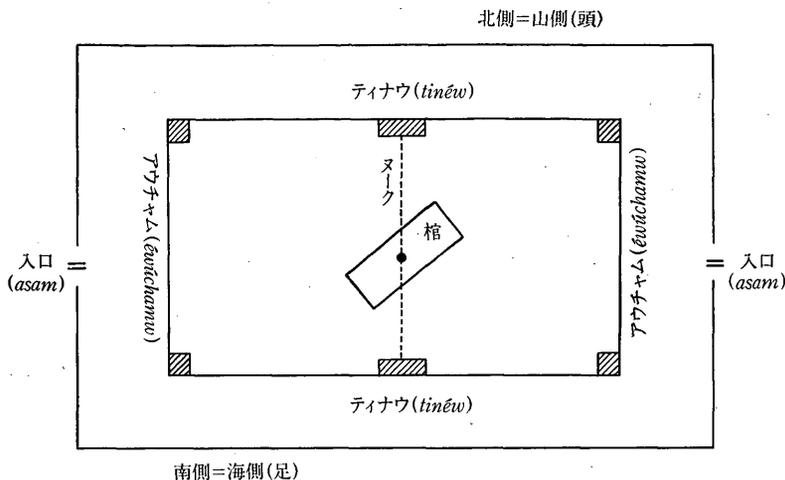


図4 集会所 (wuut) 内部の柱の名称

ここで注目したいのは、アウチャムとティナウの4本の梁（天井の横柱）の囲む空間がアウチャム・ヌーク (*éwúchamw nuuk* 額の中心の意味) と呼ばれていることである。さらに、集会所内部に建っている6本の柱のうち、ティナウの中間にある、北側と南側の2本の柱もヌーク（中心）と呼ばれる。また、この2本のヌークの柱を結んだ線もヌークであり、その2本の柱を結ぶ線の間が、家全体のヌーク（中心・腹）となる。

集会所内部の中心部、つまりアウチャム・ヌークは、さまざまな儀礼が執り行なわれる聖なる空間である。集会所で、結婚式、葬式のような儀礼を行うとき、主要な関係者の坐る席がこのアウチャム・ヌークである。さらにまた、かつては集会所内の北側のティナウの中間の柱に神棚が吊してあり、エヌーナップ、セメンカーロル、ヌークエイネンその他の神々に食物を捧げた。

現在でも、ウーム・ウワ (*wuumw wuwa* 首長に食物を献上する儀礼) をはじめとする儀礼の際、集会所の中心（ヌーク）にウーノン (*wuunong* 食物を入れる木製の大きな容器) を置いて儀礼的会食を行う。これは食物を神々に捧げる行為である。

集会所の空間構成および家のヌークの政治的意味は稿を改めて詳述する必要があるが、さしあたり、首長の葬式の事例に限ってヌークと政治の係り方の一端を説明するに留めたい。首長かその近親者が死んだ場合、その棺は集会所の中心に置かれた。しかも、ふつうの棺と区別するため、棺は集会所の中心に斜めにして置かれた。その際、頭を山側（北）に、足を海側（南）にする。方角は言うまでもなく民俗方位である。

ところで、集会所の建築過程において儀礼が特に重要なのは、柱を建てる時である。その時、集会所の建築に関与した人々は大きな容器に呪薬を入れ、それにヤシの水を注いで飲む。その後、家の「鼻」（入口の近くにあり、横柱のアウトチャムに対して上側に垂直に立つ柱、図3参照）にその薬を塗りつける。薬をつけるのは、集会所を使用する人々の友好的な関係を祈願するためである。

集会所の中心の床下に石を埋めるのは、集会所が完成した後である。石を埋めるのは、集会所そのものと、そこを生活の場とする人間の関係を「動かない」ようにするためである。その後、特製の呪薬をヤシの葉で包んで絞り、その汁を仕事に参加した人々全員が飲む。それは、造り方が悪いとそれに携わった人は必ず死ぬと考えられているので、悪霊の災を避けるためのものである。

集会所だけでなく、大きな家を造ったときにも、家の中心に石を埋めることがある。その際、家の所有者が、石を埋める前に家の中心に横たわり、その石を自分の腹の上に乗せる例もあった。ここに、家の中心において腹と石とが重複する具体例を確認できる<sup>15)</sup>。

石がヌーク（腹・中心）に関与する第三の例は、ファナン（料理場）であろう。ファナンは、いわば石の竈である。伝統的なファナンには屋根がかけられていて、民家や集会所と基本的に同じ構造を持ち、やはり人間の身体名称が建物の部分名称となっている（図5、図6参照）。

ファナンとは灰の意味である。灰は食物と象徴的に同一視される。ファナンの「灰があれば食物があるのと同じ」である。ファナンはまた土地とも同一視される。「ファナンがあれば食物を採ってくる土地がある」とか、「ファナンがなければ土地がない」と言われる。それゆえ、ファナンは土地と食物の象徴である。ファナンを持つことによってはじめ、その母系氏族 (*eterekes*) が一人前とみなされる理由はここにある。

その意味で、ファナンは同じ地域にまよって住む母系氏族の「腹」である。言い換えれば、ファナンは人間の腹のように母系氏族の食物を置く場所である。ファナンの竈の石は、ファナンの中心（ヌーク）にある。

以上のように整理してくると、石は確かに中心に対応するのだが、それはいずれも男性の管轄領域であることが明らかとなる。換言すれば、ソウマル伝説に結びついた村の中心と氏族の政治の中心である集会所は、いずれも男性の司る政治領域に関与しており、また石焼き料理は男性の仕事とされているから、ファナンも男性の領域に入

15) 家を建てたとき石を埋める位置は、死者の棺が置かれるのと同じ場所（ヌーク）である。神々に捧げる食物も、集会所または民家の中心に置かれた。中心（ヌーク）が食物の置かれている場所であり、かつ宗教的意味を付与された空間であることは、ここからも明らかである。

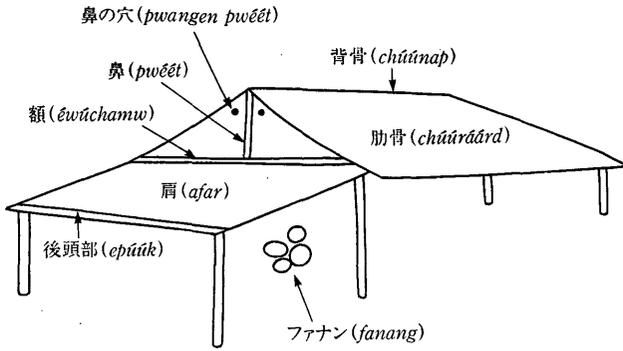


図5 ファンナの部分名称



図6 伝統的タイプのファンナ

る。中心（ヌーク）は子供を妊娠し産む女性の腹（ヌーカン）で象徴されることが多い。しかしながら、石が中心性の象徴となるときには、男性の管轄領域の中心を表していることになる。それは女性の中心性の原則を下敷きにしながらも、男性の中心と女性の中心とを互いに分離させるトラック文化の特徴をよく表している。

## V. 結 び

今までの議論からもすでに明らかなように、トラックにおいて腹は、さまざまな理由から社会と文化全体の中心性の象徴となる。それを個条書式的にまとめるなら、次のようになる。

第一に、腹は食物の座である。従って、人間の腹は、島、村、土地、ファンなど、食物の豊富にある場所と同一視される。

第二に、腹は人間の身体を中心に位置する。従って、島、村、土地、母系集団、家屋などの中心と同一視される。

第三に、腹は人間の生命の再生産の中心である。その意味で、母系氏族の女祖の腹は最初の中心（ヌーク）である。この腹の中心性は、女性（特に長女）のナー・リ・ヌーク（母と子の関係）のラインを通して永続する。

女性と土地との隠喩的連合関係が生じるのは、女性の腹が土地と同一視されるからである。土地は人間と同様、腹（食物の座）を持ち、人間の生命を維持するのに必要な食物を生産して（産んで）くれる。

以上のようにまとめると、中心は常に一つであるかのような印象を受ける。だが、事実はもう少し複雑である。なぜなら、「本当のヌーク（腹・中心）は女だが、男が女に代わってヌークになる」と言われる状況が存在するからである。

ここで、ヌークの観点から、すでに記述したデータを整理してみよう。

第一に、ウドット島全体には二つの中心がある。ウドット島の食物の中心であり、島の腹にあたるトゥンヌークと、ソウマル伝説に結びついている政治の中心であるマニティウである。

第二に、マニティウ村にも複数の中心がある。一つは、食物の中心である村のヌーカン（ヌークと同じ意味）である。二つ目は、伝説上の総首長ソウマルの居住地と、現代の政治の中心であるサペノ氏族の集会所である。ここから、村にも食物（腹）の中心と政治の中心の分離があることがわかる。

第三に、民家が女性の管轄する領域であるのに対し、集会所は男性の領域と考えられている。かつては、集会所に（特に会議中に）女性が立ち入ることは禁じられていた。集会所は男性の政治の中心だからである。

各母系氏族に男性のリーダー（*mwáánniich*）と女性のリーダー（*finniich*）がいるのも、おそらく、以上のような中心性の分離と関係がある。女性リーダーには、氏族の最年長の女性（女性のヌーク）がなる。男性のリーダー（男性のヌーク）は氏族の政治の

中心である。男性と女性の中心性の分離は、言うまでもなく、家庭内領域と政治領域の区別を前提とするが、家庭内領域における中心性の象徴である女性の腹は、政治領域における中心性の象徴である男性の頭と対照されているように思われる。

事実、トラックの各社会的・政治的レベルのリーダーは「頭」(*mékúre*)と呼ばれている。「島の頭」(*mékúre fénú*)は総首長とその取り巻きの有力者である。「村の頭」(*mékúre sóópw*)は、村の首長(*sómwoon*)とその他の有力者である。「母系氏族の頭」(*mékúre eterekes*)は氏族の男性リーダー(最年長の男性)である。頭はいずれも政治と結びついている。

頭が政治的リーダーの代名詞となるのは、頭が沈着冷静な思考の座と考えられているからである。それを傍証する次のような慣用句がある。

知識のある人だけが土地の頭

*atémeriit chék móóngren fénú.*

知識のある人 だけ 頭 土地(島)

要するに、政治は知識と思考の座である頭に対応する。

トラックにはまた、日本語の「腹を決める」という言い方にも似た、「頭で考えたことを腹で決める」という表現がある。感情的で宗教的色彩を帯びやすい腹(ヌーク)と異なり、頭は感情を抑制する冷静な思考の座である。言い換えれば、「腹の心」と対照的な「石の心」を頭を持つ。

前節で述べたように、石を身体に着けるのは、優れた人間のたとえである。頭に置いた石(*mékúrechchowun* または *mékúre maaw*)は、「腹」が立ってもそれを抑制する意味を持つ。島、村、氏族のリーダーがファウ・トプトプ(*féwú topwutopw*)と呼ばれるのも、これを例証している。ファウ・トプトプとは磨いていない石のことで、一見したところ何の役にも立ちそうにないが、責任を立派に果たす人のことである。ファウ・トプトプのように、目だたず、おとなしく、頭に石を置いているかのように動かないで、怒らない人にリーダーの資格がある。石が村の政治の中心、あるいは集会所やファナンの中心と深く係っているのは決して偶然ではない。石は男性の中心性と政治力の象徴なのである。

以上のように考察を進めてくると、腹の中心性は、もう一つの中心である頭との、拮抗、抑制、バランスの上に成立していることがわかる。

興味深いことに、この腹と頭の拮抗と相補性の理念は、「女は理由もなく感情的に怒るが、男は妻を大事にするので罵られても耐える」という、先に紹介したトラックの男女観に一致する。同様に、頭(沈着冷静な男考と感情抑制の座)で考え、腹(揺

れ動く心)で決めるという腹優位の理念も、「女は偉い」という慣用句に示されるような、相互に拮抗しつつ依存しあうトラックの男女観を反映している。

要するに、トラックの女性は、確かに政治が男性の掌中にあるという観点よりすれば周縁的であるが、妊娠する腹を持つゆえに、人間の生命とコスモスの秩序とを維持・再生するための中心でもあるわけである。

## 文 献

- BRINDLEY, Marianne  
1984 *The Symbolic Role of Women in Trobriand Gardening*. Pretoria: University of South Africa.
- BRYAN, E.H. Jr. (ed.)  
1971 *Guide to Place Names in the Trust Territory of the Pacific Islands*. Honolulu: Pacific Scientific Information Center, B. P. Bishop Museum.
- GOODENOUGH, W. H.  
1951 *Property, Kin and Community on Truk*. Yale University Publications in Anthropology 46, New Haven: Yale University Press.
- GOODENOUGH, W. H. and Hiroshi SUGITA  
1980 *Trukese-English Dictionary*. Philadelphia: American Philosophical Society.
- 河合利光 (KAWAI, Toshimitsu)  
1978 「食物の共有・交換・分配をめぐる——ミクロネシア・トラックの調査報告」『民族学研究』43 (2): 202-213。  
1987 Females Bear Men, Land, and *Etereke*s: Paternal Nurture and Symbolic Female Roles on Truk. In I. Ushijima and K. Sudo (eds.), *Cultural Uniformity and Diversity in Micronesia*. Senri Ethnological Studies 21, Osaka: National Museum of Ethnology, pp. 107-125.
- LABBY, David  
1976 *The Demystification of Yap: Dialectics of Culture on a Micronesian Island*. Chicago: University of Chicago Press.
- SWARTZ, Marc J.  
1958 Sexuality and Aggression on Romonum, Truk. *American Anthropologist* 60: 467-486.
- WEINER, Annette  
1976 *Women of Value, Men of Renown: New Perspective in Trobriand Exchange*. Austin: University of Texas Press.  
1978 The Reproductive Model in Trobriand Society. *Mankind* 11: 175-181.  
1980 Reproduction: A Replacement for Reciprocity. *American Ethnologist* 7: 71-85.  
1987 Review: M. Brindley, *The Symbolic Role of Women in Trobriand Gardening*. *Journal of the Polynesian Society* 96 (1): 118-120.
- YOUNG, M. G.  
1986 Review: M. Brindley, *The Symbolic Role of Women in Trobriand Gardening*. *Oceania* 57 (1): 70.